

## 今井町の町並調査

建造物研究室

今回の今井町町並調査は、文化庁と建設省が昭和52・53年の両年度にわたって共同で実施する国土総合開発事業調整費による歴史的環境保全市街地整備計画調査である。第一年度目に文化庁が行う調査は、伝統的建造物群の保存状況調査と復原調査で、これらを分類評価し次年度の保存修景計画策定のための基礎資料とするのが目的である。調査には当研究所と大阪市立大学建築学教室・株式会社日本設計事務所とが共同してあたり、奈良県教育委員会が協力した。

昭和44年から47年の4年間にわたって、当研究所が奈良女子大学と共同で行なった調査を参考にしながら、今回は御堂筋の全戸について、主屋と敷地全体の実測調査を行い、今井町全域については、外観の観察と聞取りによって建造物を用途別・年代別・保存度別・階高別・持借家別・定住年数別等の分類調査を行なった。調査結果は分類調査については縮尺 $\frac{1}{1000}$ の建物配置図におとして各種分類図を作成し、御堂筋については縮尺 $\frac{1}{200}$ の現状・復原連続平面図と、縮尺 $\frac{1}{100}$ の現状連続立面図、および縮尺 $\frac{1}{200}$ の復原連続立面図を作成した。

分類調査の結果、ここ数年来新しい変化が進行しながらも、今井町全体としてみると伝統的町並を現在もきわめてよく保持していることが明らかになり、町内の道路や敷地割、町を四周する環濠の旧状もほぼ明らかにでき、町づくりの基礎を追求する道が開けた。また、既往の調査との比較から、町家の分割や併合が頻繁に行われていることがわかり、町家の正面外観については二階が時代と共に発達すること、江戸時代末期以降は格子が主流になることなどが認められた。また、独立家屋と小規模長屋とでは改造の様相が異なるので、独立家屋と長屋が一体となって発展した町の変遷について考察する上で複雑な問題を提示している。

今回の調査では町並の変遷を明らかにする点ではやや不十分であることが指摘されよう。主屋と敷地全体についての建設当初からの復原と変遷を明らかにし、さらにその考察過程で各戸についても一度復原調査を検討するといった繰り返しの作業が必要であろう。しかし、こうした膨大な作業には、現在の調査スタッフや調査費では限界があることも事実である。

建設省側の調査は市街地保全整備計画基礎調査として都市計画的観点から行なった。この調査は文化庁側が行う伝統的建造物群の調査と密接に係り合っており、建設省との共同調査が画期的であるにもかかわらず、両者の調査の方向や内容、結果について相互に検討する機会が少ないことも問題点と言えよう。

今井町の調査は旧環濠内に限られてきたが、少なくとも旧今井領全域についての調査が必要で、今井町を取囲む環境として保存の是非や、保存の方策を検討することが迫られている。今井町が全国的に見て、都市として歴史的環境をよく保存している代表的な町であることは指摘され続けてきた。今回の調査で保存の方向が固まり、事業計画が策定されようとしている。この事業計画は全国の範となり、典型例となるだけに、期待が大きい。(吉田 靖・上野 邦一)